

## 「松本市文化芸術振興審議会」第6回審議会の議事概要

- 1 日時 平成27年11月4日（水） 午後3時から午後5時まで
- 2 場所 大手会議室A（大手事務所6階）
- 3 出席者 （委員） 笹本会長、花輪副会長、山根委員、小松委員、宮嶋委員、瀧沢委員、倉澤委員、辻本委員、佐久間委員  
（事務局） 久保田文化振興課長、村井文化振興担当係長、小林主査
- 4 議事等
  - （1）開会
  - （2）配付資料説明
  - （3）議事

### 【文化芸術を担う人材の養成及び確保に関する論点】

——事務局から「文化芸術に関心を高めるための子どもたちへの取組み」を説明——

（委員）

- 子どもたちへの取組みは、学校教育が基盤だと思う。
- 博物館や美術館に行くなど具体的に学校教育に取り込んでいるのか？

（事務局）

- 具体的に把握していない。基本方針の対象には学校教育の内容も入るので議論の対象
- （委員）
- 子どもたちに伝えることのできる大人・教員の取組みも必要。子どもに刺激を与えられる大人をどうつくるかを前提として押さえない。
  - 芸術文化に触れる機会を増やすことも大事だが、いかにして子どもの好奇心をそそるかという意識も大事にする必要があるのではないか？

——事務局から「若手芸術家への支援、指導者育成」を説明——

（委員）

- ここで言う芸術家とは？

（事務局）

- プロとして芸術の分野を目指している活動家をイメージしている。

（委員）

- 芸術家という呼び方は注意が必要。例えば伝統工芸の分野では「職人」、現代アートの分野では「美術家」など、捉え方や時代や創作への思いで違ってくる。

- 若手芸術家への支援は機会を作るだけではなく、機会を得ることで新しいつながりができ刺激を受けて伸びていくので、どういう環境を創造できるかだ。すごいと言われる人たちが2~3人松本に常駐して活動していると人も育つ。国内外のコンクール出場など登竜門的なところをサポートするのも支援になるが、松本の中で考えると、もうちょっと踏み込んだことが必要
- 学生に対する奨学金なども方法のひとつになる。ただし、市民のお金を使うのであれば、市民に説明できる理由が必要だ。
- 支援はチャンスを捉えていないとできない。工芸の五月について言えば、チャンスを3年前に落としたと思っている。松本は面白いと言って人が集まって来たが、今は選ばれにくくなった。何故かと言うと松本は作家がお金を払って来ていたが、他のところは彼らのプロとして認め、活動環境を作った。そういうことを細かく見ていくともう少し何ができるかわかっていくのではないか？
- かつて松本市には工芸の専門学校があって、外から作家を目指す人が集まってきた。今、松本在住の作家は、クラフト推進協会にも一人だけだ。とても危機的なこと。
- ものづくり関係は、技術は継承するが新しい価値を生まず、時代に対応できていないから後継者が育たないということがあり、伝統技術だけを守る育成支援に補助を出すのは逆効果にもなる。少し視点を変えて新しい発想と古くからの技術を結びつけるようなことをすることの方が大切だ。
- 時代の波をいち早く捉え、社会の変化を認識できる体制がまずは必要。他より良い環境が作れないのなら、光が当たっていないところをいち早く見つけるしかない。
- アーティスト・イン・レジデンス（以下AIR）（※）について、他県のAIRを見たときに観光的意味合いが強いと感じた。具体的にどういう人を支援していくのかという軸がないと、AIRをどうやっていくのか方向性が作れない。
- アーティストバンクは、松本市内の芸術家を把握して、その人たちを支援していくというよりも、芸術家を管理するのかといった誤解を招く可能性がある。
- アーティストバンクは実際にあるのか？  
（事務局）
- 現在はない。ジャンルに関係なくこれから情報を集めようというものだ。  
（委員）
- 「担う人材養成及び確保に関する論点」について、担う人材養成と、若手育成・支援は同じ。見る側と作る側を分ける必要はない。施設から出なくても、展示が良ければ人は来る。「地域の活性化や地域づくり」との関係はもう少し整理が必要だ。全体像が見えるようにしたい。
- 芸術に特化するのではなく松本市の文化全体を上げるという観点で支援策を考えてほしい。

——事務局から「文化芸術専門職の育成・資質向上」及び

「文化ボランティアの育成」を説明——

(委員)

- 美術館などは同じ職員がある程度専門的にやっていかないと難しいのではないか？

(事務局)

- 美術館は市の行政の人事で異動するので、そこに踏み込むというのは難しい。

(委員)

- 文化をやるには専門職が必要。取組方針に「プロデュース力、マネジメント力、コーディネート力を持つ職員を育成し」とあるが、職員を育成できる体制が作れなければ、全国のどこかから優秀な人を引っ張ってくるしかない。その場合、その人に総合性があるかどうかが大事になる。
- リーダー育成講座は、受講している参加者が主体性を持たないとうまくいかない。
- ボランティアをまとめるプロがない。研修をやれる人がいない。もう一度基本から入っていかないと
- ボランティアの育成とは何か、ボランティアとは何かがはっきりしていない。この先松本はどういう状態になっていったらいいのかというイメージを明確にしたい。
- 「松本市の文化ボランティアの活動領域」を見ると、旧松本市の活動しかない。地域の小さなボランティアのようなものがたくさん出てくると自分たちの共同体に誇りを持つてる。
- 松本市の文化芸術がどうあるべきかというものを、見えないままに論議をしている。10年先20年先を明確に出して、それに対してどうしていくかをやっていくのがいい。

——事務局から「顕彰」を説明——

(委員)

- 表彰制度は必要だと思うが、他薦か自薦かで決まっているのは良くない。政策的にうまく使えば、市民のやる気も高められる。
- 松本市文化芸術表彰は、平成19年からとのことだが、その経緯を教えてほしい。

(事務局)

- 平成19年前は、市の芸術文化祭実行委員会（以下、実行委員会）が表彰する制度だった。市制施行100周年の際に、実行委員会ではなく市が表彰する制度にリニューアルをした。市の制度では、大賞が新たに創設されている。

(委員)

- それではモチベーションにはならない。思いがけない受賞の話がきたとかチャンスが来たという賞ならば、よりモチベーションにつながる賞になると思う。

- ジャンルも、芸術に限らない広い意味での文化芸術を対象とする発想が必要だ。

——事務局から「これらの取組みを総括する分野目標案」を説明——

(委員)

- 「私たち」とは誰か？

(事務局)

- 市民であり、市である。双方を念頭に置いている。

(委員)

- 文章を読むと「私たち」とは「松本市」と読める。今まで市民が「松本らしさ」を継承し、創造の源となる人づくりを市がするのだと思っていた。
- この基本方針を、市民の人に読んでもらい、実行してもらいたいのであるのなら、どう書くかという視点がほしい。
- この文章は目標ではなく方針だと思う。
- 市の文化はこうあるべきだという目標をまず置いたうえで、きちんと方針を立てていくという描き方をしてもらえるとわかりやすい。
- これは、松本市が少しでも文化的な都市になっていくために、文化芸術振興の基本方針を示すものだ。主体者が誰なのかを明記するとともに、具体的にわかりやすく書いてもらったほうがいい。行政文書としては失格でも、伝わる文章を。そこから新しい松本市の文化振興が生まれる。

※ アーティスト・イン・レジデンス

芸術家が一定期間滞在して作品制作及び地域との交流を行い、これに対し支援するプログラムのこと。